

退職して思うがままに・・・

加藤 芳登（J A阿新O B）

はじめに

平成20年6月下旬、岡山県畜産協会から何か牛にまつわる投稿を・・・と依頼され思案いたしました。筆をもつこととしました。

さて、私事、平成20年3月末をもってJ A阿新を退職いたしました。

顧りみまずと昭和44年3月獣医師免許取得後、(株)オハヨー乳業に就職し、その後、昭和50年2月、J A阿新に転職し、管内の和牛・乳牛の診療を中心に仕事をしておりましたが、昭和56年4月、岡山県農業共済連阿新診療所の開設により、その後は畜産振興中心の仕事となり、昭和57年(社)全国和牛登録協会から地方審査員に登用(68—012)

されて以来、本格的な千屋牛とのふれあいが始まり、長きに亘り関係者の大変なるご支援を頂き勤務することができました。紙面を借りて心より御礼申し上げます。

共進会との出会い

私が社会人としてのスタートは、乳牛との出会いでした。乳牛の栄養度・手入れ等の出品対策の状態から、和牛のこれはどうなっているのかな・・・？と感じたものです。

昭和57年の第4回全共(福島)に管内から8頭(雄1、高3、繁4)が県代表として出品することとなり、私と前岡山県畜産課長の金山聖さんが獣医師として派遣されることになりました。

折しも、丁度台風と共に会場へ向かうこととなり途中通行止め・各SAでの食事の売り切れ等大変な全共でした。福島全共での印象は、栄養度・出品技術(調教、手入れ・・・等)共に岡山を含む中国4県が群をぬいていました。反面、舞台裏は大変な苦勞の連続(各出品区毎に出品時間にあわ

せての対策・・・給餌・手入れ・給水・引き運動等々)でした。中には強制給水までも、ここまでやらなければいけないのか？と自問自答した次第であります。

しかし、この全共で管内の出品技術の低さを痛感させて頂き後のかてとなりました。特に、東さん、藤長さん、池田さん達には、非常にお世話になり、心より御礼申し上げます。大変ありがとうございます。

こうして福島全共を終え、その後は管内の出品技術向上に向け、当時の阿新地区優良種雌牛育成組合の方々と協議しながら一丸となって研修を重ねる事といたしました。

共進会のあり方、審査のやり方等色々な御意見があると思いますが、参加する以上(社)全和登の示す審査方針にのっとり、良く研修・検証して最終の審査に照準を定めて、その時ベストの状態出品することがポイントととらえて全員で県共進会はもとより、全共にも出品牛は全頭優等入賞を合言葉に努力してまいりました。そうは言っても日頃の努力は大変なものです。(一例を記しますと、その牛のくせを早くみつけること・・・どんな状態の時でもよく食べる草などの確認、腹容の膨れ具合の確認等々)以来全共には、鳥取全共までずっと付き合いさせて頂きました。

結果、J A阿新管内の出品牛は、県共、全共、共にほぼ満足する成績を得ることが出来ていると、確信してやまないと思っております。(ややいいすぎかも・・・・・・?)

種雄牛造成へのお手伝い

いろんな面でお手伝いさせて頂いた中で一番印象に残っているのは岩手全共を終えた平成9年10月(社)全和登の並河会長から本松県支部長宛のメッセージを、当時の草苜中央委員から紹介され岡山和牛育種

組合（秋森百治組合長）として取り組んでみようと関係者7名で鹿児島県の故徳重学氏宅に繁殖中の「利幸土井」を見に伺いました。

本牛をみた瞬間、大先輩から教えてもらった言葉「天角・地眼・鼻漏・一黒・鹿頭・耳小・齒異」を思い出しました。関係者一同、異口同音に精液を利用しニュー岡山種雄牛造成に取り組もうということになり、指定交配を実施し「利花」「沢幸土井」二頭の種雄牛が誕生しました。これらの産子が雄、雌共に岐阜全共・鳥取全共で大活躍してくれ、今日の岡山和牛ここにありと思っている次第です。

私も関係者の一員として参加できた事に大変幸福者と感謝致しております。

最後に

先般6月24日（社）全和登の創立60年記念にあたり、はからずも和牛登録事業の推進と和牛改良に努めたとして、全国同志71名の1人として、表彰して頂き、心あまる光栄と思っております。これは、日頃より直接和牛農家と接触し日夜をとわず奮闘されている同志の代表として頂いたものであると思っております。

また、JA阿新（千屋牛振興会：二摩紀昭会長）として「千屋牛の地域商標登録の取得」（平成19年5月15日登録第5054531）が在職中にでき本当に幸福者と思っております。

以上、とりとめのない内容になりましたが、関係各位のご健闘を願うと共にご支援に対し深く敬意を表して筆をおきます。